

---

# uo推理小説・完全版

いざよいキラー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

u o 推理小説・完全版

### 【Nコード】

N 2 7 9 7 A

### 【作者名】

いざよいキラー

### 【あらすじ】

ウルティマオンラインがモチーフな推理小説です。主人公・越前康介が軽やかな推理を奮って、ゲーム内で起こった殺人事件を鮮やかに解き明かします。これもかなり字数を削ったので完全版です。

前編　雅を博す源たる者

それは……

吟遊詩人が忌み嫌われていた、いにしえの事。

バタン

瘦身長軀の男が渾身の力を以って、重い鉄の扉を押し開けた。  
その者は馬に乗ったまま、友の住処へと進み入る。

非常識とお思いか？

人馬一体は烏帽子と同様、貴族の嗜み。  
ハシゴを登るときですら騎乗は欠かせない。  
足を土に汚すことは、ソーサリアの民にとって最大の非礼であった。

（嗚呼、それにしても……）

ボト…ボト……

くぐもった蹄の音色が廊下に響く。

それにしても、

北極の地に佇む石造りの城砦は、なんと寒々しい物か。

ところどころに飾られたタイマツの灯火を見るに、  
此処の主も同様の寂しさを感じているのだろう。

詩人は鳥の飛び方で全てを悟る愚者だが、  
彼はしかし、そんな自分を誇りにすら思っていた。

ボタン

最後のドアが解き放たれる。

男は西洋の琴を爪弾き、己の来訪を伝えた。

---

越前康介シリーズ  
湯煙旅情編・序章  
謎の火柱殺人事件

---

「久しぶりだな、越前」

名は博雅。

ソーサリアの世界ではGrand Master | bird of the  
omasaとして、  
雅楽の腕を存分に振るっている。

「……」

「越前、いるか？」

陰惨な殺人事件を解き明かす主人公は『越前康介』といった。  
青いフルプレートと、そして。  
もう一人の語り手。

「おい」

世界がまだ一つだったころ。

激動の時代を飄々と流れていった男の物語が今、  
始まろうとしている。

「返事をしないか越前」

続く

## 前編／コンバット越前／

「ん」

越前康介が反応を示した。

「おおh i r o m a s a か」

姿も隠さず画面から目を離すなど自殺行為に等しい。

もしも侵入者が盗賊であったなら、身包み剥がされていたところだ。

「…」

博雅はこめかみに指を当てて、嘆息した。

博雅

「やれやれ」

主人公・越前康介は、ゲーム内で途方もない富を築いた。だが同時に自身の財産に対しては、まるで頓着がない。

そこで至極当然なる疑問を抱いた博雅は、こう訊ねたものだ。

『ロクに狩りもせず、どうすればそれほどの財を築けるのか』と。

彼は寂しそうに笑って誤魔化すだけだったが、

経験を重ねた今、博雅もそれを知っている。

博雅

「生きていたか」

越前

「ひどい挨拶だなw」

「小説を読んでいた」

越前は青表紙の本を閉じ、机上に添える。

「一冊100gpだが」

「これが、なかなかに興味をそそられる」

博雅がページをめくると、

その表題には「俺とポンキッキ」と銘打たれていた。

博雅

「すまん、邪魔したか」

越前

「気にするな。一献どうだ？」

博雅

「いや」

「今日は酒を飲みに来たのではない」

越前

「そう言っな」

「酒を拒みに来た訳でもないだろう」

博雅

「……口の上手い奴だ」

越前

「この酒は、もっと旨いぞ」

グビグビ

博雅

「うむ」

「全く美味しい酒だ」

越前

「w」

グビグビ

杯が交わされた。

ソーサリアの酒に味はないが、食事はパンのみに非ず。

\*ヒック\*

モニターの中で酔いどれるキャラクターを見るだけで、人はささやかな幸福を手に入れることができる。

（これは心を満たす食事……）

\*ヒック\*

やがて博雅は、しばしの談笑を楽しんだ後、本題を切り出すこととなる。

\*ヒック\*



彼の第一声は、こうだ。

「越前よ」

「お前は『人体発火現象』なるものを知っているか？」

## 前編　粉雪を溶かす、赤く

『人体発火現象を知っているか？』

越前

「なんだいきなり？」

酒の場で切り出すには、あまりにも素っ頓狂で、  
そして不自然な言い回し。

「…ああ」

越前は隠された真意を探ろうとして、しかし。

その行為が朴念仁のステロタイプ（博雅）に対しては  
全くの徒勞であることにすぐさま気づき、かぶりを振った。

博雅

（相変わらず、妙な反応をする奴だ）

こと雅楽に関しては天の寵児たる博雅だが、  
アスファルトに溶ける粉雪のような機微を理解するには、  
まだ日が浅い。

越前

「……ヒトが突然、焼け死ぬってヤツか」

オカルトに関しても幾許かの知識はある。

越前康介は、記憶の引き出しを一つ一つ、開きながら答えていた。

「怪しげな雑誌で、よく見かけるな」

博雅

「そう」

「それだ」

「俺はな、UOで」

「ソレらしき現象を、目撃してしまったのだよ」

越前

「……」

果たして主人公・越前の意表をつける人物が世界に何人いることか。

「www」

博雅

「笑いすぎだぞ、越前」

ソーサリアの世界では『w』が一つで『（笑）』二つで『（爆笑）』  
ところが三つ以上は嘲りを示すとされ、非礼に当たる。

もちろん越前は見逃していない。

博雅の指が腰の刀に触れかかっていたことを。

もしも四つ以上『w』を出したならば、主人公は斬られていただろう。

四つなら一度、五つ出せば二度。ここはそっいう世界だ。

越前

「いいのだよ……これで」

余計な『w』は、いたずらに気を回しすぎる自分への戒め。  
彼は博雅からの諫言をもって、己に科す罰とした。

「はは」

「もしかして“Flame strike”か？」

「アレを喰らえば、見た目はまさに人体発火そのものだ」

博雅

「いや、違うのだ。よく聞け晴明よ」

（晴明？）

主人公・越前康介は残念ながら、  
行く先々で殺人事件に巻き込まれるような奇運は持ち合わせていない。

そんな彼が始まりを予感した。

（会議室で起こることもある、か）

ボトルに残ったジンジャーエール。

最後の一滴を飲み干した瞬間のことだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2797a/>

---

uo推理小説・完全版

2010年10月10日22時14分発行